

【学会レビュー】

第 35 回日本生理心理学会大会

(江戸川大学, 2017 年 5 月 27 日, 28 日)

浅岡 章一*・福田 一彦**・高澤 則美***

はじめに

2017 年 5 月 27 日, 28 日の 2 日間にわたって, 第 35 回日本生理心理学会大会が本学 (江戸川大学) において開催された。本稿では, 日本生理心理学会の概要を紹介するとともに, 35 回大会の様子を報告する。

学会概要

日本生理心理学会は 1982 年に発足した。その前身となる生理心理学懇話会 (後に生理心理学・精神生理学懇話会) は, 今から 50 年前にあたる 1968 年に第一回の懇話会が開催されており, その頃から現在に至るまで脳波や筋電位, 眼電位, 皮膚電気活動など, 様々な生理学的指標を用いて心理学的研究を行う生理心理学・精神生理学を専門とする研究者の集まりとなっている。研究対象となるテーマではなく研究手法の共通性により研究者がまとまっている学会であることも, 日本生理心理学会の特徴であるといえよう。実際に, 会員によって行われる生理心理学・精神生理学的研究で取り扱われるテーマは感覚・知覚, 情動, 認知, 睡眠, 虚偽検出, スポーツ, 障害, 発達など多岐にわたっている。会員数は 2017 年 4 月の時点で約 580 名である。その多くは大学に所属する

教員や研究員および大学院生であるが, 大学以外の学術研究機関や企業に所属する会員も少なくない。同学会からは年に 3 回, 機関誌「生理心理学と精神生理学」が発行されている。なお 35 回大会で発表された全ての研究の抄録は「生理心理学と精神生理学」35 巻 2 号に掲載される予定となっている。

大会概要

第 35 回日本生理心理学会大会は, 本学の高澤則美名誉教授を大会長, 睡眠研究所長の福田一彦教授を事務局長として 2017 年 5 月 27 日, 28 日の 2 日間に渡り, 江戸川大学の駒木キャンパスにて開催された。この大会が会員同士の交流や議論の機会となるのはもちろん, 生体反応という具体的な測定値を手掛かりとして行動のメカニズムを考えようとする生理心理学・精神生理学の視点が, 他の心理学諸領域にまで広くつながって行くようにという期待をこめ, この大会では「つながり」がテーマとして掲げられた。

シンポジウム・特別講演

大会のプログラムには, 大会準備委員会が企画した特別講演と 2 つのシンポジウムに加え, 会員の自主企画による公募シンポジウムが組み込まれた。

特別講演では, 警察庁科学警察研究所捜査支援研究室長の横田賀英子先生による「犯罪者プロファイリングの理論と実際」と題する講演が行われ, 統計分析や心理学的な行動分析に基づいた科学的な犯罪者プロファイリングの概要, 理論, および

2017 年 11 月 30 日受付

* 江戸川大学 社会学部人間心理学科准教授, 睡眠研究所 研究員 生理心理学・精神生理学・睡眠心理学, 第 35 回日本生理心理学会大会準備委員会会計

** 江戸川大学 社会学部人間心理学科教授, 睡眠研究所 所長, 生理心理学・精神生理学・睡眠心理学, 第 35 回日本生理心理学会大会準備委員会事務局長

*** 江戸川大学 名誉教授 生理心理学・精神生理学, 第 35 回日本生理心理学会大会準備委員会委員長

実証的研究が紹介され、多数の参加者が熱心に耳を傾けた。

大会企画シンポジウム I として初日の午後で開催されたシンポジウム「生理反応測定と行動科学とのつながり — 瞬目・自律系に注目して —」では、福田恭介先生（福岡県立大学）から「瞬目発生のタイミングと心理過程」、廣田昭久先生（鎌倉女子大学）から「対人コミュニケーション状況における顔面部の発汗活動と皮膚血管反応の意味・機能は何か」、小川時洋先生（科学警察研究所）から「隠匿情報検査研究から見た生理心理学」と題した話題提供が行われた。このシンポジウム I の内容は、他の心理学諸領域への生理心理学・精神生理学的指標の広い応用可能性を感じさせるものであった。

2 日目の午前中に開催された大会企画シンポジウム II の「ひろがる睡眠学 — 工学と医学と臨床心理学の立場から —」では、樋口重和先生（九州大学）から「子どもの夜の光に対する高い感受性と概日リズム」、高橋敏治先生（法政大学）からは「時差ぼけを精神生理学的に研究する」、山本隆一郎先生（江戸川大学）からは「不眠の病態生理と認知行動療法」との題で研究の紹介が行われた。シンポジウム II の内容からは、睡眠研究を行う上での生理心理学・精神生理学と周辺学問領域との学際的取り組みの重要性が感じられた。

さらに、この大会では会員による自主企画シンポジウム・ワークショップの公募が行われた。公募の結果、採択されたシンポジウムは金山範明先生（広島大学大学院）が中心となって企画された「安静時脳活動の利用と展望」であった。このシンポジウムでは、近年注目されている安静時の脳波計測に関する最新の研究結果が、中尾敬先生（広島大学）、川越敏和先生（島根大学）、高村真広先生（広島大学大学院）から紹介され、小野田慶一先生（島根大学）による指定討論が行われた。

ポスター発表（一般演題）

本大会では、ポスター発表が会員同士のディスカッションの機会として重要視され、例年以上の時間がポスター発表に割り当てられた。一般演題としてのポスター発表の数は 100 を超えた。本学 E 棟 211 および 311 教室を用いて全てのポスターの 2 日間を通じた掲示が可能とされたことにより、ポスター発表の在籍時間だけでなく、それ以外の時間帯にもポスターの前で活発な議論を行う会員の姿が多く見られた。上述の通り、発表された研究のテーマが多岐に渡るのももちろんのこと、脳波、fMRI や光トポグラフィーなどの中枢神経系の計測指標から、呼吸や脈波、皮膚温など自律神経系の指標、さらには唾液中の物質など、用いられる手法も幅広く、生理心理学・精神生理学的研究のひろがりを感じとれるものであった。

おわりに

大会当日は天候にも恵まれ、大会には日本全国から約 300 名の研究者が参加した。そのうちの約 1/4 が非会員の参加者であったことは、今後の他領域への生理心理学・精神生理学研究の広がりを大いに期待させるものであった。また、初日の昼休みの時間帯には若手研究者（大学院生）による Data Blitz が、夕方からは懇親会が行われ、多くの参加者がそれらのイベントに参加し交流を深めた。

最後に大会事務局から、この場を借りて参加された会員の皆様、機器展示・広告・協賛等でご協力いただいた企業の皆様に感謝申し上げたい。また、本大会の開催にあたり江戸川大学の事務局からも多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第である。